さらしなの里

友の会だより

第３７号　　２０１７・秋

縄文まつりの司祭を務めた塚田克巳さん。今年２月、逝去

さらしなの里に根づいた縄文まつり

1万年も続いた縄文時代は日本文化の源流だといわれています。自然との共生、助け合う心、そこから生まれ出る豊かな精神性は発掘された土偶、土器に現れ、現代社会では「まなぶべきは縄文の心」とも言われています。初代さらしなの里友の会会長の大谷秀志さんは「冠着山直下のこの里は縄文人の豊穣の地であり、この自然環境の中で人々の純粋な魂と精神が養われ、これが奉仕の心となって生きている。このことが縄文まつりに受け継がれている」と言われました。

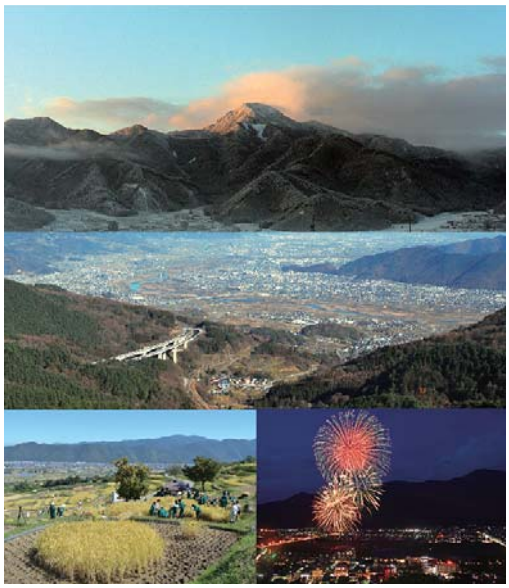
さて今年で25回を迎えた縄文まつり。鬼籍に入られた先人の皆様の意思を確実に受け止め、この地に生きる者が鍋、釜、手間を持ちよって、夫婦、子供でまつりを支え楽しみ、そして縄文人のごとく大きな変化を期待せず、原点を見失うことなく歩み続けたいと思います。少子高齢化が進行するさらしなの里ですが、更級小学校は地域学習の一環として第14回のまつりから全校で参加し、このことが大人たちの大きな励みとなりました。また児童が減少する中で子供たちが学年ごとに、しっかりとした目標を持って地域と一緒につくる縄文まつりにしようと頑張る姿は、ほほえましく、いつの日かこの子供たちがまつりを支えてくれると思うと力がでます。特に25回目は6年生が子供らしい感性のパンフレットを作りました。このことは昨年5年生として目標をもって一生懸命に取り組んだ結果です。さらしなの里縄文まつりの趣旨「縄文の生活を実体験するなかで先人の知恵に触れ、大勢のみなさんと交流し新たな文化創造を図る」を実現するため、子供から元気をもらい、大人もしっかり取り組んでまいります。

第25回を記念し、当地で発掘された土偶を原形とした縄文キャラクター「さらどん」で、まつりを盛り上げると同時に謎に包まれた縄文土偶を全国に送り出したいと思います。また前回までの豊穣儀礼で縄文の神に祈りを捧げ独特の雰囲気を醸し出し、また音響機材一式を持ち込んでまつりを支えてくれた塚田克巳さんのご逝去に、心からご冥福をお祈りすると共に機材一式をいただいた奥様に御礼申し上げます。終わりに、この「さらしなの里縄文まつり」が一層充実し、都人あこがれの地、歌枕の地「更級」が、少子高齢化の中で輝きを増すよう皆様のご協力をお願いします。

（さらしなの里友の会会長・豊城巌）

「さらしな」の絵本制作へ

保育園の先生と協働



千曲市内の保育園の先生たちも参加して、「さらしな」の絵本を作る事業が始まりました。

さらしなの地名を地域づくりに生かす「さらしなルネサンス」が今春発行したガイド冊子「美しさらしな」は、中学生以上向けの内容だったので、次は小さな子どもたちにも読んでもらえる絵本を制作することにしました。

8月から毎月1回、5人の保育園の先生と一緒に制作会議を開催。どのような絵や物語にすると、子どもたちが驚き、楽しんでくれる絵本になるかを話し合っています。さらしなルネサンスのメンバーはどちらかというと年配の人が多く、伝えたい思いが先走りがちだったのですが、毎日、幼児と接している保育園の先生方からは、子どもたちが手にしたくなる本とはどんなものかについての貴重な意見をもらっています。

これまでの会議で大筋定まった絵本の姿は、さらしなの地名や景観の美しさに加え、食べ物のおいしさや昆虫のすごさが感覚的に伝わるものです。子どもがページをめくったら「わあすごい」「わあきれい」と口にし、実際に行ってみたり、体験したくなるようにしたいと思います。冠着ヒメボタルも候補です。お父さんお母さんも子どもに読み聞かせしたくなる絵本を目指します。

幼少期に、自分が生まれた地域の魅力に触れ、それを誇りとし、成長して故郷を離れても、また戻りたくなるきっかけになるようなものに仕上げたいと思います。

絵本の制作は、ガイド冊子「美しさらしな」同様に千曲市協働事業提案制度を活用した事業です。今年度末の発行を目指しています。写真は、ガイド冊子「美しさらしな」に載せた、さらしなの里の魅力的な景観です。

（芝原区・大谷善邦）

リレイ
里麗エッセイ

最近思うのですが

羽尾5区　森　一己

私には3人の孫がいます。女の子です。皆さんのおかげですくすく育っています。上が小学校6年生で、真ん中が今年入学したピカピカの一年生。一番下が保育園で再来年、小学校へ入学します。

小さい時はよく泣いたので、たまには抱っこして寝かせた時もありました。怒ったりおだてたりして大変でした。

でも、最近は逆に注意を受けることもあり、たまげています。言われても可愛いいものです。やっぱりいつも、いっしょにいるからですかね。

自転車に乗れたからと言ってみんなで喜び、「ご飯を早くたべなさい」とか「早く寝なさい」とか、いろいろ書けばきりがありません。しかし不思議なもので、わが子も男2人いるのですが、恥ずかしながら夢中で育ててきたせいか、あまり覚えていないのです（主に妻に任せっきりでした）。

いい加減なものですね。だから、孫たちのやることやしぐさがなんとなく新鮮に見えることがあります。若いということは良いですね。昔は良かったなんて言ったら笑われるかもしれませんが、書いて人に物事を伝えることの難しさはあります。今回、この機会を与えていただきましたが、半分も書けませんでした。他人のこと、また子供のことを、出来るだけ考えていきたいものです。

更級小に縄文人クラブ復活

「今私たちが生きているのが2017年ということを考えると、縄文時代はものすごく長い間続いていたんだ」

さらしなの里歴史資料館の翠川泰弘さんから歴史年表を見せていただきながら、子どもたちと話したクラブ初日。美しく磨かれた飾り玉を触り、このクラブでは自分たちでこの飾り玉を作れるんだ！という期待に、6人の子どもたちが胸を膨らませました。

クラブを担当した私自身は今年度より更級小学校にお世話になり、この一年は新しく更級小学校や地域のことを学んでいます。更級小学校が全校みんなで大切にしている行事として「縄文まつり」があると聞いて、とても興味を持っていました。そして、4年生以上が取り組むクラブ活動で、縄文人クラブを担当することになり私は、おもしろそう！とわくわくしました。

更級小学校は地域の方に支えていただきながら多くの活動を行っていますが、クラブ活動もその一つとして、地域講師の方から子どもたちが直接学ぶ大切な機会となっています。しかし、縄文人クラブは近年、クラブ数や活動人数などの都合もあり行われていませんでした。そこで、

1学期「飾り玉」　すべすべひんやり暑さ忘れる

2学期「土器」　実際に使い縄文人に近づきたい

今年度は縄文まつりが25周年を迎えるということもあり、クラブ活動からも盛り上げていきたいと考え、募集をかけました。そして、冒頭に紹介した6人（途中から7名）の子どもたちが興味を持って入部し活動しています。

クラブの時間にはさらしなの里歴史資料館へ行って活動しています。翡翠（ひすい）を見せていただいたり、原石を持たせていただいたりするなど、普段学校ではできないことも体験させていただけます。ライトに照らされた翡翠の美しさは格別です。古代の人たちが翡翠の美しく若葉を思わせる輝きに「生命の息吹」を感じていたのだろうという翠川さんの話に、子どもたちもうなずきながら聞いていました。

1学期には飾り玉を制作しました。四角く大きな石をやすりで削り磨いていきます。完成したのは暑い時期でしたが、磨きあがった飾り玉のすべすべひんやりとした手触りに、子どもたちも自然と笑顔になりました。

2学期には縄文人が煮炊きに使っていた土器を、自分たちで制作していきます。現代の私たちが縄文時代の生活用具を制作し、実際に使えたとしたら、縄文時代の人々の生活へ想像が膨らみ、彼らの思いに少しでも近づける気がします。

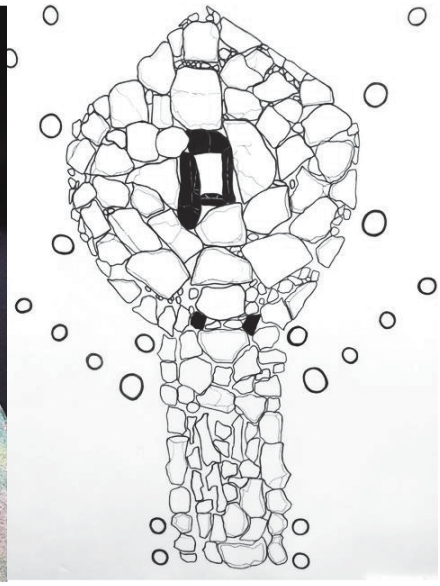
そして、縄文人の締めくくりとして「縄文まつり」に参加するときには、今まで以上に、縄文人の思いを自分の中に感じながら、活動ができるでしょう。更級ならではの縄文人クラブ。土地に息づいてきた古代の人々の思いを感じながら、未来とつながっていく素敵なクラブです。

（更級小学校教諭　中村孝子）

お母さんのような冠着山
お母さんのおなかの中のような柄鏡形住居

おらほの冠着 35

冠着山のふもと、羽尾の円光房地籍にある円光房遺跡には、柄鏡形敷石住居と呼ばれる縄文時代の住居跡（左の写真、模型）があります。縄文時代の中期後半、今から約4500年前に出現し、縄文後期前半約3500前でこつぜんと姿を消す謎の住居。名前は江戸時代に流行した柄のついた鏡（現代でいう手鏡）に、上から見た形が似ているためです。



円光房の敷石住居の場合、冠着山の安山岩や閃緑岩が使われています。円光房遺跡から冠着山までは徒歩3時間。重い石を背負って下山しています。一軒の住居で30枚くらいが使われています。1枚5キロとしても150キロです。相当な執着があったことをうかがわせます。この石は板状節理といって、5センチくらいの厚さで板状にはがれます（上山田の荒砥城の城壁もこの石で造られています）。

なぜこの形なのか。出現期は日本列島が現在の平均気温より2度も寒くなった寒冷化のピークの時期であることが関係している可能性があります。平均気温2度の寒冷化とは、現在の北海道に匹敵します。

想像になってしまいますが、危機にひんした時、人は必死で自分を守るようになります。自分を守る場所は、自分が最も安心していられる場所です。そこは、自分を育んでくれた最も安全な場所、お母さんの子宮です。おそらく縄文人も古墳時代人も最も安心できる場所として、胎内で守られていたときの形を創出したのでしょう。この形は縄文時代の後の古墳時代、死者を葬る石室のモデルともなりました。その形が柄鏡の形に似ているので柄鏡形住居と名付けたのだと思います。

母性愛から生まれた姨捨伝説

劇的な寒冷化でも自分を守ってくれる場所、安らかに眠れる場所を創出したのでしょう。現代人の脳が発達しているから最先端だなんて傲慢な意識を持ってはいけません。過去から継承されて現代があります。「過去に学べ」は現世を生きるための基本中の基本です。

もう一つ、縄文人はなぜ円光房の地を選んだのか。おそらく、冠着山があったからなのでしょう。天城山、富士山、八ヶ岳赤岳、蓼科山、戸隠高妻山、雨飾山など日本列島の南北を直線に走る霊峰。その中にひときわ優しいお母さんのふところにいるような、心地好い、やさしい山が冠着山だったのではないでしょうか。

だから時をこえ、奈良平安の都人もこの地を訪れたのでしょう。姨捨伝説の真髄は「母性愛」です。彼らの求めたのは、【母性愛】なのです。現代人も同じです。善光寺があるように、仏教文化の高かった善光寺平南部。仏教文化の力を借りて、文字の力を借りて、教えを形に残したかったのだと思います。（さらしなの里歴史資料館学芸員・翠川泰弘）

編集後記　さらしなの里で始まった縄文まつりが25回目を迎えました。途中インフルエンザの流行で中止がありましたが、四半世紀。年を重ねた人の一方で、子ども時代に縄文魂に触れ、社会に出て活躍している人がたくさんいます。まつりに込められた思いを詳しく知りたい方は、第15回を記念して出版した「里と人にいやされるさらしな」をご覧ください。

編集・発行
さらしなの里友の会だより
編集委員会
（事務局・さらしなの里歴史資料館）
〒389-0812
長野県千曲市羽尾247の1
電話 026（276）7511
fax 026（261）4161